

## 沼野さんとへその話

阿部 公彦

沼野充義さんが東大に着任されたのは1985年のこと。1954年生まれだから、当時まだ31歳。東大最年少教員の一人だっただろう。1985年は私が教養学部で文科三類に入学した年だから、授業に出ていておかしくはなかった。そういえば、私は沼野さんの担当ではないが、第3外国語・ロシア語のクラスに登録し、一度も授業に出ていないのになぜか「A」がつくという、当時ならではの珍事も経験していた。紙一重である。

最年少教員であるにもかかわらず、「ヌmano」という名はよく耳にしていた。当時私は由良君美先生の演習に出ていたのだが、由良先生はこの若き俊英の名をたびたび口にしたり、その授業にはおどろくほど博識のロシア科の学生も出席していて、たとえば言うところ「アゼルバイジャンの人口は××万だ」「いやそんなことはない△△万だ」といったことが強い口調で議論される雰囲気があった。話はロシアや東欧方面の文学に向かうことも多かった。

何しろ「壁」崩壊前の時代。さすがにスプートニク・ショックの余韻は消えつつあったが、ソ連邦はまだまだ知的好奇心をかき立てていた。六年一貫の私立学校に通った私は、レオ・ヒューバーマンの『アメリカ人民の歴史（上・下）』を読んですっかりそっち方面にかぶれたりしており、高校1年の自由研究では「ソ連とは何か」なる表題を立て、神保町の南海堂書店でトロツキーの伝記を買いこんで一生懸命作文を仕上げたりしていた。伝記はアイザック・ドイッチャーによる三巻本で、今でも実家のどこかにはあるはずだ。その自由研究の残滓のようなものが最近発見され、頁をめくってみると、担当して下さった歴史の先生の「こんなじゃ、ぜんぜんダメ」みたいなコメントがある。実に懐かしい！

私が本郷に着任してからは、ついにナマヌmanoとお目にかかる機会が出来た。いや、それどころか、沼野さんは私のような若輩に親切に手を差し伸べるようにして仕事をまかせてくださり、何度も貴重な機会をいただいたのである。

とりわけ記憶に残っているのは、安田講堂で行われた大江健三郎氏による講演会である。この記念すべきイベントを間にたって企画されたのは沼野さんだったが、御自身は表に出ないで、藤井省三さん、安藤宏さん、野崎歓さんと私とで壇上に上り、講演後の大江さんにそれぞれ質問を投げるといふ大役を仰せつかった。

しかし、本番のことよりも私にとって思い出深いのは、会に先立って安田講堂の控え室で大江さんと束の間、ご一緒したときのことである。私たちが待ち構えていると、大江さ

んはにこやかにというか、にぎやかにというか、とにかく慌てたふうには部屋に入っていて、「これを忘れてはいけません」などとおっしゃりながら、鞆からネクタイをとり出し「妻にこれを忘れちゃいかんと言われてまして」とその場でネクタイを締め始めたのである。その後は、講演にそのままつながるような独演会が控え室で展開され、私はよけいな言葉を発することなく、ただただ、呆氣にとられてそのオーラあふれるご様子を眺めていた。

こうしてみると沼野さんにも、大江さんに通ずる圧倒的なオーラがある。おもしろいことにこれは「他を寄せつけない」という形容とは正反対の、どちらかというところ「他を引きつける」もしくは「他をまきこむ」吸引力をもったオーラだ。大江さんと同じで沼野さんには陽性のにぎやかさがある。一言話し始めただけで「ヌmano的時間」が流れはじめ、周囲は呆氣にとられてながめているしかなくなる。もちろんこれは文章の魅力にもあらわれている。当時、すでに沼野さんは、研究者としてのみならず、文芸評論家としてもゆるがぬ地位を築いていたが、そんな場でも独特のオーラが放たれていたのである。

もう少し最近の例では、数年前に沼野さんのお誘いでご一緒した文芸イベント「人生に、文学を」のことも思い出深い。ある大手出版社が企画したこのイベントは、有名作家を呼んで講演やインタビューを行い、その様子を録画してネットで配信するというものだった。大手広告代理店が仲介したかなりおおがかりなイベントだったが、沼野さんはこのときも裏方に徹する一方、細かい準備まで先方まかせにせず、すべてぬかりなく緻密に行った。

ところが、このとき、予期せぬことが起きたのである。イベントは昼頃からの開始だったが、沼野さんは朝から大学で待機し準備に余念がなかった。しかし、この緻密な準備が今回ばかりはアダとなったのである。何と沼野さんを載せた、わが文学部三号館自慢のエレベータが途中で完全停止。沼野さんは一時間も中に閉じこめられてしまったのである。すでにスマホの時代ではあったが、レスキュー隊が到着するまでに時間がかかったらしい。

このエレベータ、ふだんから動きが非常に緩慢で、到着まで待たせる上、3階や5階まで上るだけでもけっこうな時間がかかる。しかし、そのおかげで沼野さんの世間話を耳にすることもできる。「ねえ、金澤先生。僕はいつも、あの鈴木っていう学生を見ると佐藤って言っちゃうんですよ。あのふたり似てるでしょ？ ね？ ね？ ところが本人たちにそれを言うと、全然似てないって怒るんですよ。似てますよねえ？ どう見たって似てる。それに一度似てると思ったが最後、意識しちゃうから、よけいこんがらかるんです」なんていう会話が交わされているのが、エレベータ待ちの人並みの後ろの方から聞こえてくるのだ。とても癒やされる。そんなエレベータでの出来事ゆえ、これもめぐりめぐって一種の宿命かもしれないと思わざるをえない。

ちなみにこの時のイベントでは、私は西村賢太さんの講演の司会を担当することになっ

ていたのだが、西村さんが到着してみると「え？ 講演？ いやいや困ったなあ。ボク、お金がいいっていうから引き受けただけでね。何も準備してないすねえ」などと、小説そのまんまの調子。ともかく何かしゃべっていただかないといけないので、結局、「インタビュー形式で」ということになったが、何しろ、私としては尊敬しつつ畏れてもいる西村さんだったので、緊張のあまり、西村さんが作家のKさんのことをおちよくるところでは不覚にも天井を向くほど爆笑してしまい、恥ずかしい思いをした。

これは別の機会だが、ある打ち上げで行った呑み屋でたまたま沼野さんと遭遇。先方はかなりにぎやかな大人数の会だったが、沼野さんは私たちのグループにも話しかけてくださって、「いやあ、最近は冷蔵庫にほうれん草があるはずだと思って、それを出して食べようとしたところまではいいんだけど、ふと気づくともうどこかにいっちゃってないんですよねえ。ほんとに困るんですよ。ついさっきそこに出しておいたのに、もうないんですよ、ほうれん草が。どこにいったんだろうと思いますよ、ほうれん草」というような話をしてくださる。

そうすると、さすが沼野さんのオーラ、私はそのあともずっと沼野さんの「消えたほうれん草」のことが気になったままになる。その日、二次会でバーに行くと、ふだんはブティックで働いているという、細身で未来的な化粧をほどこしたMさんがアルバイトで入っている。「あたし、ずっと体調が悪かったんです」とのこと。聞いてみると、事は友だちとカラオケに行った後に起きたとのこと。さんざん呑んで、歌って、朝起きたらお腹が痛い。「あ、歌い過ぎて肉離れになったかもしれない♪」なんて思っていたのだが、症状がどんどん悪化。起きていられないほどになり、ついに医者に行くと、悪いのは「お腹」ではなく「おへそ」だという。たまにいたのだが、生まれたときのへその緒の端っこが残っていて、そこが炎症を起こしているとのことだった。

「ええ！」とびっくりしていると、大学病院のやさしそうな顔をした医者はさらにこう告げたのである。

「へそ、取っちゃうしかないですよ」

ブティックで働く、未来風のファッションに身を包んだ女性は（医者に行ったときは未来風だったかどうかかわからないが）その場で声をあげたという。

「へそ、取るんですか!？」

Mさんはショックのあまり、あたりかまわずオイオイと声をあげて泣きだしてしまった。

「へそがなくなるなんていやです。へそがなくなるなんて…」

すると見かねた看護師さんが駆け寄ってきて、「大丈夫よ。おへそ、とらないから。おへそ、なくならないから」となぐさめてくれたという。

結局、Mさんのへそはとられずに済んだようだ（泣けばとられないのか、と私は思ったものだ。そもそも、へそは「トル」ものなのだろうか）。しかし、海にいったときは、

ばい菌が入るといけないということで、おへその上に大きな絆創膏を貼らざるをえず、まるでへそがなくなったように見えたという。

二次会では沼野さんは別のグループだったので、私がこの「へその話」を聞いたときにはその場にはいなかった。しかし、私の頭の中では沼野さんの消えたほうれん草と、エレベータに閉じこめられて消えた沼野さんと、このMさんという女性の消えそうになった「へそ」の話とが妙につながってしまって、どれか一つを思い出すとき、必ずそのほかのこともイモづる式というか、へそづる式につらなって脳裏に浮かぶのである。